
おでん

彩月空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おでん

【Nコード】

N2103G

【作者名】

彩月空

【あらすじ】

激しい空腹の最中にみつけた一軒のおでん屋。そこで私は思う。今よりも幸福な食卓を過ごしたことがあっただろうか、と。

今日は月がない。

こんな日は憂鬱を通り越して絶望だった。
外灯が消えると世界が闇に包まれるからだ。

「暗い、というのは、怖い」
それが、私がこのような生活を初めてから学んだことのうちで、最も印象深いことだった。

寝る場所を求めてあちこちを彷徨う。
草原、公園、どこかの家の庭……。
転々と眠れる場所を求める。

寝る場所もそうだが、それよりもお腹が空きすぎていけない。
もう思い出せないほどずっと前に、ゴミ箱をあさって腐った魚を食べたつきりだった。

毎日のように枕を濡らす。
いや、枕なんて上等なものなどあるはずがない。
そうだな。毎日のようにボロ布を濡らす夜が続いた。

そうして誰が見ても分かるほどに、がりがりに痩せてしまった身体と
力が入らない足を引きずって、私は今日も闇夜を彷徨う。

~~~~~

ふと、良い匂いが私の鼻をひくつかせた。  
首を動かして匂いの元を探る。

あれだ。

おでんの屋台がそこにあった。

私は走った。

まだ自分の中に走れる力があることに驚く。

私は走った。

それはもう無様な姿で走った。

幸運というべきか、客はいなかった。

屋台の主人は手持ち無沙汰で新聞をめくっていたが、私が近づいてくるのに気づいて、はじめは目つきを険しくした。

それは当然だろう。

だって、私はこんなみすばらしい格好をしているのだ。

だからゴミを見るような目で見られても仕方ない。

しかし、私は諦めない。

たとえゴミだと思われても、否、たとえゴミであったとしても。

どうしても、おでんが食べたいのだ。

そんな思いつめた瞳をしていたからだろうか。

主人は、ため息をつくとお皿の上にくつつかのおでんを乗せて、それを私の前に差し出した。

「食べよ」

ぶつきらぼつだったが、私にとっては世界で一番優しい言葉だったように思う。

情けないほどに衰弱していた私だが、目の前に食べ物が出されたことで理性に歯止めがきかなくなった。

がむしゃらに、がつつく。  
食べ方が汚いだなんて言わないでくれ。  
もっとゆっくり食えだなんて言わないでくれ。

私の人生で、これほど美味しい食事はあつただろうか。

「美味しいか？」

主人はそう言つて、空になつたお皿にまたおでんを乗せてくれた。  
私はまたがつつく。

美味しい。美味しい。美味しい……ああ、美味しい！！

この世で一番幸福な食卓を過ごした私の頭を主人がやや乱暴な手つきでなでてくれた。

ああ。

このおでんのおかげで、私はお腹も、そして心も満たされた。  
荒んだ心が浄化されていくのを感じる。  
もう生きられない、死んでしまいたい。

と思つていた自分がいたことなんて忘れてしまいたい。

世の中には、こんなにも美味しいものがある。

こんなにも私に優しくしてくれる人がいる。

それだけで、充分ではないか。

だから、私は自分のもてる精一杯の感謝の気持ちを込めて、主人に向かつて口を開いた。

そして、告げたのだ。

「じゃあ」

と。

了。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2103g/>

---

おでん

2011年4月4日10時26分発行